

資料涉猟余話

その153

大正元年（一九一〇）十月五日午前七時、飯田を発った天龍峡探勝会の一行は馬車二台と人力車三十台を連ねて、乗船地の時又に向かった。天気は快晴だった。一行の時又着は八時。松川屋で龍丘村民の歓迎を受けてから、新聞記者団と写真隊員は二隻の探勝舟に分乗した。八時半、前後を見送り舟に護られ、二艘の舟は探勝旗を翻しつつ徐に出発した。

舟が天龍峡の入り口である垂卒磯を過

の難所と言われた村民の歓迎を受け「櫓（矢倉）の滝」にさしかかる。普通に通船はここで一時停船して客を降ろし、乗客は川沿いの陸路を歩いて越す。流れが緩慢になった所で再び乗船するの

が通例であった。午後二時二十分、平岡村の満島港に着いた。一行は、そこからかなり登った所にある長野館と日本

昔日の天龍川探勝記録 中

時又く満島く中部への舟行

鎌倉 貞男

一行の時又着は八時。松川屋で龍丘村民の歓迎を受けてから、新聞記者団と写真隊員は二隻の探勝舟に分乗した。八時半、前後を見送り舟に護られ、二艘の舟は探勝旗を翻しつつ徐に出発した。

一行は富草村大島館に分宿した。村民の希望で、夕方、記者団長の永田正治と萬朝報の細井猪太郎が、簡単な演説をした。七時半、料理店橋本屋において村民の歓迎会が開かれ、全員が出席した。

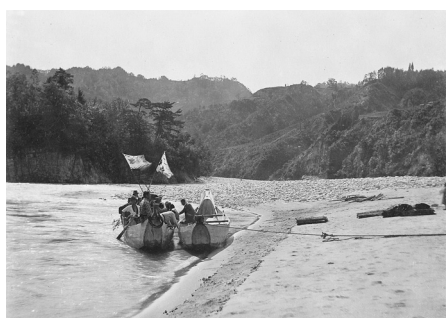
こつした新聞報道を見ると、この企画は流域の村々でとても歓迎されたようだ。翌朝七時、一行は満島を出発した。午前八時、舟は信（長野）遠（静岡）三（愛知）の国境を越した。やがて舟は、遠州の大難所「與利方滝」にさしかかる。ここは白波と山室の中間にある百ほどの真



難所「茶々淵」の激湍



「櫓の滝」を通過する探勝隊



「御供」での停船



遠州一の難所「山室の滝」

つ直ぐな瀬で、とても急流だった。続いて、遠州一の難所と言われた「山室の滝」である。旧山室駅より左岸上流にあった。滝の長さが四十ほどで落差が大きく、抜けるのに大波をかぶった。目印の石に付けて乗り入れたが、ゴトという凄音が心胆を寒からしめた。今まで左右前後に峰がそばだち、兩岸に樹木が鬱蒼としていたが、ここまで来る

と、視界が開けて、一時に明るい世界へ出たような心持ちになる。河原で昼食をとった。上流の時又や満島から下ってきた客も一旦ここで下船し、この舟に乗り換え、この舟に乗り換え、その意味で、中部は信州の船頭と遠州の船頭の接点であった。新聞記事では、満島く中部間の十里

と記している。

は、実に天下の奇勝であると評している。満島より上流は、岩石の奇は多いが、山も低く、水も少ない。しかし、満島下流は次第に山も高く、水も多くなり、川幅も開けて雄大なる。そればかりか、激しい早瀬が岩を噛んで滝となる場所が多く、曲折に富み、千態万化である。